富本芸術の息吹き香る

レストラン～「五風十雨（ごふうじゅううう）」～

カウンターレストラン～「アーティチョーク」～

宿泊客室～「竹林月夜（ちくりんげつや）」～

宿泊客室～「日新（にっしん）」～

安堵町の文化観光発信基地　「うぶすなの郷 TOMIMOTO」

開館記念対談

安堵町長　西本安博氏　×　うぶすなの郷 TOMIMOTO　マネージャー　川井澄子氏

奈良県が生んだ近代陶芸の巨匠・富本憲吉の生家（安堵町東安堵）がリノベーションされ、レストランや宿泊、陶芸などが楽しめる「うぶすなの郷 TOMIMOTO」として生まれ変わった。運営するのは観光事業などを展開するノブレスグループのワールド・ヘリテイジ（奈良市高畑町、川井徳子代表取締役）。文化価値の高い木造家屋やかつて環濠住宅であった堀のある風景を残しながら、法隆寺、太子道を核とした広域観光の拠点となる施設運営を目指す。

同館の至る所に、富本の陶芸作品のモチーフとなった四季折々の植物が溢れている。それらの植物が色成す庭園を眺め、自然の息遣いと、美しい時の流れを五感で感じることのできる、「おもてなし」を行う考え。同館を地方創生の拠点と位置付ける安堵町の西本安博町長と、同館の川井澄子マネージャーに対談してもらった。

西本氏　安堵町の活性化に期待する
川井氏　偉人ストーリーをアピール

―うぶすなの郷 TOMIMOTOが開館しました。どのような思いですか。

西本　ここは富本憲吉の生家ということで、今までは展示中心の記念館でしたが、もっと人が行き交う施設として生まれ変わりました。これは安堵町を活性化する意味で、とても歓迎しています。

川井　富本憲吉の功績と、文化的価値の高い生家が売りに出されると知り、弊社の代表がこの家を守ろうと始めたのがきっかけでした。このプロジェクトに携わり、町の歴史を深く調べれば調べるほど、この町が富本憲吉をはじめ、偉人の方が生まれた文化的な土壌であることを強く感じます。少し立ち寄るだけでは富本の芸術性を肌で感じることは難しいと思います。やはり、滞在しゆっくりと感じてもらうことをPRしていくことが大事になってくると思っています。

西本　代表は実業家として多くの事業を手掛けられています。採算性だけを考えれば、他にもあったと思います。代表は富本憲吉の技と心に感心していましたから、それを守り伝承したかったのだと思います。

―町としてこの施設をどう応援されますか。

西本　一緒になってこの施設を盛り上げ、そして町の知名度アップにもつなげていきたい。首都圏で奈良県の安堵町と言ってもピンとこないでしょうが、世界遺産法隆寺の隣で、人間国宝第一号、文化勲章受章者の陶芸家で有名な富本憲吉の生まれたところと言えば知っている人も多いと思います。いま、とても観光が大事だと言われていますが、観光だけを考えればテーマパークでもつくればいい訳です。

安堵町は平安時代から連綿と続く町ですから、集積した文化が評価されて安堵町に行ってみたい、住んでみたいと思ってもらえる観光と交流につなげることが大事です。安堵町にしかない文化の発信の中核的な施設になっていただきたいし、私どもも応援させていただきます。

川井　安堵町の芯には古き良きものを守るという考えやスタンスがあると感じます。連綿と続く文化に対する豊富な知識があるから、良いものを残そうという力が働くのだと思います。この施設を通じてその部分をちゃんと伝えられるようにしていきたい。古民家など古い建築物を勉強してきましたが、いざ使うとなると、掛け軸一本、お花の生け方なども難しいと実感しました。先人の方々の日常の行い一つ一つが大切にしていかなければいけない文化だと思います。

―川井マネージャーはプロモーションをどう展開されるのでしょうか。

川井　宿泊して食事ができるというだけでは他の古民家宿泊施設と同じになってしまいます。安堵町が生んだ偉人の富本憲吉、そして生涯の友人であった今村荒男は医学界に大きな功績を残されています。そして、荒男の父、勤三は奈良県再設置の中心的な役割を果たしています。安堵町が輩出した偉人に光を当て、これらのストーリーを広く伝え、その延長でこの施設を知ってもらうプロモーション活動を考えています。

西本　いま、川井さんがおっしゃったこと、それが私ども安堵町の大きな特徴です。この町には奈良県再設置の中心人物であった今村勤三、その子息の今村荒男は、旧制郡山中学校で富本憲吉と同級生でした。荒男は予防医学では日本の大家です。結核予防のBCG接種を確立し、いわゆる結核患者の死亡率を10分の1に減らした。ご存命であればノーベル医学賞ものだと思っています。

そんな方々がこの地で生まれ育った。そのようなことに思いをはせ瞼（まぶた）を閉じると、この家の前で、小さい頃の富本憲吉と今村荒男が一緒に遊んでいて、そこに今村勤三がやってきて「遊んでばかりいないで、勉強もせえよ」と注意しているシーンが浮かぶ。そんな魅力的な原風景が残っています。

―レストランでは地元食材をふんだんに使われるようですが。

川井　食事は奈良、地元、旬をキーワードにしています。なぜ、料理長が旬にこだわるかというと、旬のものを食べるのが体に良いからです。それを含めて安全安心、獲れたての料理を提供します。おいしいのは当たり前なので、体に良い料理にこだわりたいと思います。

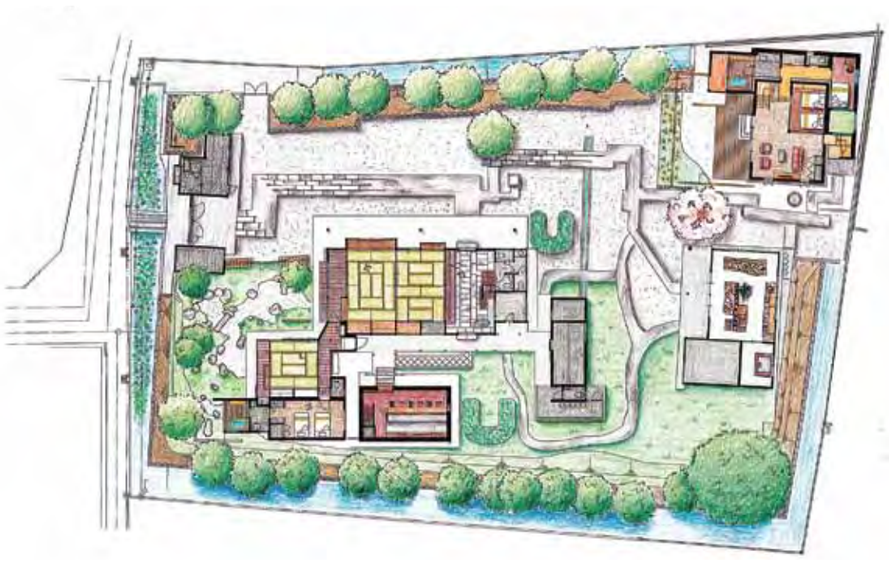
西本　地元には曲がったキュウリなど形の悪い野菜がありますが、それらは農薬を使っていないからとてもおいしい。そういう食材を使ってほしいと思っています。

―最後に今後の抱負をお願いします。

西本　私ども安堵町は富本憲吉、今村勤三、今村荒男、この方々の功績を再度顕彰することで、安堵町を知ってもらうことに注力します。安堵町は農村の原風景が今も残る風光明媚（めいび）な町です。かたやスマートインターチェンジが開通し、交通も便利なことをアピールしていきたいですね。

川井　この施設だけの利益を考えていては、発展はないと思います。近所の方々、そして町内には桜遊会の方や観光ボランティアの方が活動されています。そのような方々と連携して施設を盛り上げていきたいと考えています。

［うぶすなの郷 TOMIMOTO］


「うぶすなの郷 TOMIMOTO」配置図

［施設概要］

▽事業運営＝株式会社ワールド・ヘリテイジ
▽所在地＝生駒郡安堵町大字東安堵1442番地
▽開業＝平成29年1月21日（土）
▽施設＝客室2室、古民家レストラン、カウンターレストラン、陶芸工房、ギャラリー
▽連絡先＝電話0743（56）3855、FAX0743（56）3854
▽ホームページ＝http://and-tomimoto.jp/

レストラン

▽カウンターレストラン～「アーティチョーク」～

富本がイギリス留学中に影響を受けたウィリアム・モリスのモチーフと出会える。ウィリアム・モリスのアーティチョークのデザインに感銘を受けた富本は、自身のモチーフを日本の植物アザミに見いだした。富本の美学とそのデザインの原点となったウィリアム・モリスの息遣いを感じられるようなつくりとなっている。世界遺産となった和食を、西洋と融合させたオリジナルの料理が楽しめる。

▽レストラン～「五風十雨（ごふうじゅううう）」～

安堵町の隣町にある法隆寺は富本にとって身近な存在であり、聖徳太子の時代から続くこの寺の由緒ある仏像や宝物を見て育った。本建物を改修するにあたり、法隆寺の大野玄妙管長が「五風十雨」の書を提供した。「五風十雨」とは、五日目ごとに風が吹き、十日目ごとに雨が降る順調で穏やかな農耕に適した気候を意味している。

宿泊

▽宿泊客室～「竹林月夜（ちくりんげつや）」～（蔵リフォームのメゾネット・最大8人宿泊）

異国で出会った友人バーナード・リーチは、しばしば安堵で作陶中の富本を訪ねている。そんな折、2人の語らいをやさしく包んだのは、月夜に照らされる美しい竹林だった。蔵をリノベーションしたメゾネット式の客室は、ツイン、セミダブル、和室の部屋を用意している。リビングから見える風景は2人が見た「竹林月夜」をイメージした。石灯篭のある坪庭が見える石風呂で、静かな時間が過ごせる。

▽宿泊客室～「日新（にっしん）」～（本館離れ・最大4人宿泊）

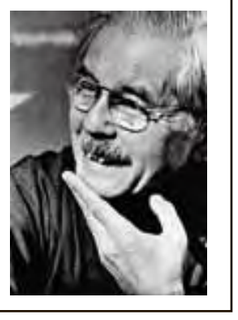
世界的な医学者で、富本の親友「今村荒男」も安堵の出身。芸術と医療というそれぞれの分野で、「日本を新たに」という思いのもと「日新」のテーマで共同の書画を残している。同郷の2人は、富本憲吉が過ごしたこの和室で、日本の新しい未来について語り合ったとも想像できる。奥の洋室は日新の名のごとくモダンスタイルの部屋となっている。日本庭園を眺められる陶板風呂もある。

工房他

▽陶芸工房&Gallery

若手の陶芸家のための工房とギャラリーとしての運営を予定してる。陶器はもとより、さまざまな美術品の展示、アート関連の書籍なども取りそろえ、陶芸体験も可能な工房として地元・安堵町、広く大和の自然・文化・歴史を感じることのできる学び・思索・体験の場としての活用を進める。

近代陶芸の巨匠―富本憲吉



明治19年6月5日―昭和38年6月8日。安堵村（現・安堵町）出身。大地主の家に生まれ、幼少より絵を学ぶ。東京美術学校に入学して建築、室内装飾を専攻。在学中にウィリアム・モリスの工芸思想に影響され明治41年、卒業前にロンドンへ私費留学。

その後来日していたバーナード・リーチと出会う。リーチの陶芸熱に影響を受けた憲吉は明治45年、京都で楽焼の道具を買いそろえると、大正2年、リーチと乾山の助言を受けて自宅の裏庭に据え付け式の楽焼窯を築いた。大正3年、尾竹紅吉（一枝）と結婚し、翌大正4年、故郷・安堵村に本格的な窯を築いて創作を開始する。昭和28年、京都市立美術大学教授。昭和30年2月15日には重要無形文化財「色絵磁器」保持者として人間国宝に認定、重要無形文化財の保持者認定制度発足後に最初に認定された人間国宝の一人となった。昭和36年には文化勲章を受章している。満77歳で死去。